

進 路 選 択

受験生が大学学部・学科をどのような動機で、どのような要因により、どのようなプロセスを経て選択決定しているか、すなわち、受験生の進路選択に関する調査は、現代の学生像の一端を把握し、大学入試の方法・制度の改善を全般的に議論する上にも、また、個々の大学がそれぞれの学風に合ったより好ましい学生を入学させる（個性のある入試を行う）方法を模索するためにも重要なテーマであると考えられるが、それほど活発に調査研究が行われているわけではない。すなわち、従来から継続して調査研究を行っている大学は約1割ほどの国立大学であるが、ほとんどが入学生を対象としたアンケート調査によるものである。調査研究の結果もとくに目新しいものはないが、以下にその概要を簡単に記しておく。

進路意識 入学者について、その大学を志望した動機・理由・目的などについてアンケート調査をした大学は5大学であるが、いずれもいわゆる単科大学またはそれに近い大学で、専門分野が比較的是っきりしている。調査結果の分析も、とくに目をひくものはないように思われたが、今後同じような調査研究が多く総合大学の学部・学科レベルで行われれば、それぞれの大学にとっても、もっと示唆に富む貴重な

データが得られるのではないだろうか。

一方、4機関が参加して進められているプロジェクト研究の一部として、職業高校生を対象に大学進学に関する意識の変容に関する追跡調査が行われている。

進路決定 大学受験についての高等学校における進路指導について、新入生を対象としたアンケート調査が行われているが（継続調査）、「個性・能力がその大学の教育内容に適合している」という理由で受験をすすめられたとする者が、あい変わらず最も多い(56.3%)ということで、高等学校における適正な進学指導に期待したい。しかし一方、「学力が足りない」という理由で受験を反対されたと回答した者がいたということは、現にその学生は入学しているということを見ると、高等学校の進学指導においては、偏差値による輪切り指導もかなり行われていることを物語っている（進学指導によって受験を反対され、それに従った者がどれくらいいたかは不明）。

共通第1次学力試験における自己採点方式が進路決定へ及ぼす影響、自己採点に関する統計、自己採点の有無による進路決定方法の相違などを論じ、自己採点方式の弊害を訴えた論文がある。